

紀下388⁷

波野という 謝少茂 1899^P
地名録 1157⁷ 謝漢 1898^P
ひまはて(ない)ま 2,302^P

かかわ ね 482^P
紀下388⁷

かんろうりう
寒え雷雨

さても、川曲^{かはな}川^{がわ}が折水^{12.5 Q M}曲^{まが}つて流^{なが}れる所^{ところ}の
坂下^{さかもと}に到^{いた}ったとき、日^ひが暮^くれた。(以下、天武紀元年六月
十五日条参照) 恐怖心^{きょうふしん}は収^{おさ}まりそうもなく、心細^{こころこわ}
く思^{おも}われた。
とはいえ、連日^{れんじつ}の強行軍^{きやうかうぐん}に、日皇后^{にちこう}はす

なわち、田心姫^{たこりひめ}。やかて第三代目の神功皇后^{じんこうこうごう}
となられるが、すっかりお疲れ^{おつかれ}になったので、暫^{しばらく}
く輿^{こし}を留^{とど}めて休息^{きゅうし}することにした。

山^{やま}の天気^{てんき}は変^かりやす^い。

● 全天^{ぜんてん}は黒雲^{くうぐも}に覆^{おお}いつくさ^れ、あたり
一面^{いちめん}が真暗^{まっくら}闇^{やみ}となり、雨^{あめ}が降^ふり出^でた。そうになった。

● そこで、ゆつくり休^{やす}めが、
ぐに出^い発^{はつ}した。

＊

めい 元 2163
姫 元 260
錦 元 260
錦の尊救済

214 468 元 1819
手打 一足 元 260
取 対心 元 260
とつけない

みす 元 211
御 簾 元 211

なんき 元 1679
難儀 元 1679
2,304

月読尊の決意
「姫御の田心姫様が、東国へお越しになら

れましした
という早打の知らせは、月読尊を大いに驚か
せた。突然の

あやたたく
「あやたたくし、急ぎに急いで途中まで出
迎えに赴いた月読尊は、南の方からや

ってくる輿へ歩み寄り、声をかけた。
「田心姫、よくぞおいでなされた。自らの手で

その言葉を耳にした田心姫は、輿の御簾を押し
開きながら言った。

「まあ、叔父様」
「うむ。御無事でなによりです。こんなに

もお小さいのに、さぞかし難渋されたことで
ありましよう」

「叔父様にお会い出来て、私、本当に嬉し
ゆうございます。ここへ来るまでずっと、恐

ろくて震えておりまして、今ようやく心
安まる思いがいたします」

田心姫は、月読尊のがっちりした胸に縫り
噓り泣きに泣いた。

「御苦労、ゆう存じます。まことに心が痛み

ほのお 炎 2047 無道 1588

2,305

いきとあり 憤 99 抑 296

まき ひん (危機に) 頻す

元 1909 23085

いたいだ 元 117 痛久し 117 紀上 148 159

ます

月読尊の目から溢れる涙が口のわきを通

つて白くはらはらと零れ落ちていった。

その雫は、見上げる田心姫の頬を濡らし、

田心姫の涙と共にはらはら散った。

健気な姫の為に、そして危殆に瀕している

倭国の為に、月読尊は泣いていた。

ここに、月読尊の心の内の怒りは、激しく

燃え上っていった。

抑えようのない憤りと、深い悲しみを湛え

た月読尊の雙眼は、炎のように真赤だった。

あまりといえはあまりの素戔嗚の暴挙、

浅まーいまでの無道の数々。もう到底、放つ

ておくわけにはいかぬ

月読尊は拳を握り固め、忿怒の形相でこう呟やいた

「素戔嗚をいまのまま勝手にさせておいた

ら、この先倭国はとうなる」とかあろうか。

やはり素戔嗚を討たなければなるまい。素戔

嗚と一戦交えるより他に、倭国を救う道は無

米

2,307^P

てきております。そして、国中の誰もかれも
か、皆、姫の爲に邪馬台国を奪回したいと勇
み立ち、姫の爲に素戔鳴と戦う覚悟を深めてい
るのです。
この気概さえあれば、何も憂慮すること
ありません。我が軍が素戔鳴と戦って勝利す
るまでの間、守備の部隊もまた、精力を
振り絞り、拘奴国の軍勢を押しとどめ、撃退
させ得る筈でありまうし
ここに月読尊は、田心姫に向かうと、優しく
こう言った。
「田心姫よ。あなたは、何という不思議な
力をお持ちなのでしょう。それには、民
の心を魅了する計り知れない力です。あなた
なら、素戔鳴に勝てる。きっと勝てる。私も
及ばず乍らお力になりまう。
たーかに素戔鳴は勇猛果敢ではありますか
ーかーとうてい宇宙に君臨するべき男ではあ
りません。事実、人心はすでに素戔鳴を見限
っておりまう。人々は、あなたに女王になつ
てほしいと願っているのです。」

容儀を正して

能う

かくろん 元 389P 境乱 ちりちりばらばらに 天つき 改行 23/10 1757
 かいろん 元 364P 潰れ ちりちりばらばらに 天つき 改行 23/10 1757
 ほんたい 小林 本隊 495
 2,308P
 透ろ 元 201P 幼い 田心姫 1037 立ち上がり 13% 紀上 335P
 紀上 336P 2305 双眼 1295P 西邸 1880P 瞳

田心姫が軍をお起しになれば、軍衆は自ず
 から田心姫を慕い聚つてまいりましよう
 月読尊は、田心姫を陣頭に戴いて、立ち上
 がるうと言ふのであつた。月読尊の眸は光り
 輝いていた。
 幼い田心姫の心の内に、月読尊の熱い思ひ
 が、染み透るやうに伝わつていつた。
 代神功皇親ら斧鉞を執つて三軍に令したし
 という祖母の姿を、我が身に置きかえて想像
 しながら、――田心姫は、強く領いた。
 ついに――素戔鳴尊との戦ひが決行さる
 ことになった。
 田心姫を擁する月読尊の本隊は、邪馬台国の
 北方から敢然と戦端を開き――
 臣の長子意美志留が率いる隠勢は、阿蘇の外輪山の
 西方へ駆け下つて都城の南面を突き、互いに相
 呼んで、攪乱しようという計略が採択された。
 他方、中臣伊香刀美およびその次子那志登
 美（藤原氏の祖）の祖の、あううとは、豊国に残
 つて、東の国拘奴国の侵入を防ぐ任に当るこ

→ 読み区 H2.9.30
H4.2.15(土) ⑤

18とう
初頭 1124^P
249年1月15日 ⑤ 2264^{P-1/2} 2,309^{P-1/2}

軍神(八幡神) 432^P
→ S60.8.13 ⑤ 2305^P 5^P

軍人 100^P
→ 定174たい ⑤ 2318^P 中
あ 2283^P 19^P

と とな った。

* なお、こういふ由縁から、中臣氏の分家筋

〔那志登美の子孫〕が豊国で大きな勢力を持つよ

うになつた、と解してみたい。

月読尊は、生まれながらの軍人であつた。黄

金色に煌めく甲冑に身を固めた軍神月読尊の軍

神八幡大神は、練りに練つた軍略を次から

次へと熱情を込めて打ち出していった。

＊

田心姫の行軍

魏麻呂のいえは正始十年(二四九)早

春のことであつたらうか。

木々の芽は心なしか僅かばかり脹ら

みを増し、いま息を詰めて暖い春の日

訪水を待つていた。

ある日、意美志留は邪馬台国

から随行してきた精兵を引き連れ、そつと

戴く 118P
改訂

2,309^P-¹/₂

ふたえのとうけ
二重峠 紀本半の史教歩
原野 (瀬田原野)
5万分の1地図
②2327P ③109¹/₂地図

王又珠 和名地 641' 逆賊 小村 762'
石原田 紀上 288' あたかも きながら 表面上
大分郡 1216 まるで ぎって

伊邪国 (宇佐国) を離れた。
△逆賊 素戔嗚を討つべし
という激しい憤りを内に抱きながら
その素振りさえ見えぬまゝ、何事もないか
のような面持ちで、意美志留達は己百支国 (碩田国・大分郡) へ入り、そして阿蘇外輪山の西端に位置する「二重峠」(立野の北約四) を目指した。(第12回へ肥後国主要部の地図参照)
ここから、密に都の様子を窺い、時至れば外輪山の原野 (瀬田原野) を駆け下って、都城の南正門を襲う手筈になっていたのだ。(五万分の一地図、第12回参照)
*
一 方月読尊は、姉日御子の忘形見である田心姫を擁して、西への道をとった。
小は正に、照り渡る太陽を頭上に戴いて行軍するようなものであった。
7 姫は、いずれ我等が女王 日御子になら

「いや何と云」 2382 2,310 P

何と云かかんとかい (4) (5) 2336 1183 1368 2336 2313-1/2 169
はなは 金銀 663 金銀 663 金銀 663 金銀 663
木刀 2031 石槍 2031 石槍 2031 石槍 2031

米

るお方だ。その姫の爲に戦うのだし
兵士達は、我ニそ武功を上げんと心晴
やかに勇み立ち、刀矛や弓矢等の武器を携え
軍旗を靡かせながら進撃していった。
「私も、姫君の御爲に戦いとう存じます」
田心姫拳兵の報を聞き知って、銚・猪・槍
大刀・棍棒などを手に手に駆け聚って来る者
達が後を絶たず、――――軍人の行軍の
列は、瞬く間に、長く長く伸びていった。
の長蛇の列は、なんともしやばり心算しそ
に見受けられた。
あの邪悪極まりない素戔嗚を成敗に行く
のだ、ということが余程嬉しいようであつた。
「いかも、日の御子となるべき田心姫と共に
戦うのである。人々の心は、狂気せんばかり
に陽気になり、自らに浮き立つのだった。
「こうして、田心姫を擁する月読尊(月天忍
穂耳尊)の大軍は、勇ましくも賑賑しく、川
を渡り、山裾を縫い、西へ西へと進んでいっ
た。

こうぼう
高峰 2758'

2,311' - 1/2

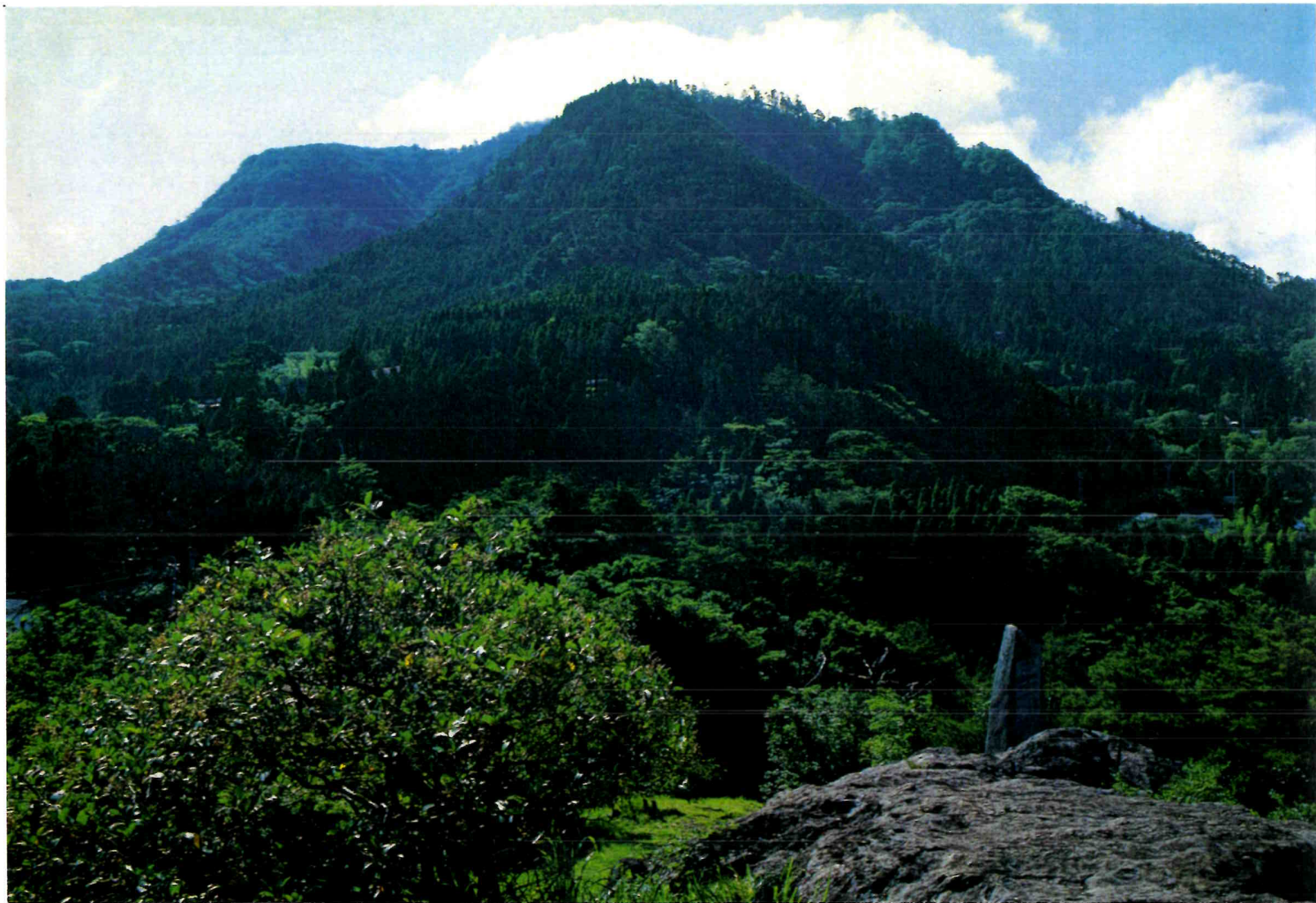
帝国地名辞 1298'
北九州の旅 153~4

「月の前」 2319' 中
560.8.15

眼前にある山、英彦山、三峰中の中央は、日高千穂峰と
呼ばれてゐる。この中岳には、天平十二年
(七四〇)藤原清足の創祀と伝える英彦山神
社があつて、天忍穂耳尊を祀つており、歴代
皇室、武家の崇敬があつた、という。
(「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版会
山。北九州の旅」旅研社、一五三〜四頁
参照)
一九六六年十月二十日発行
(二二〇〇頁)
宇佐のすぐ西方の高峰英彦山に、天忍穂
耳尊あまのほみみみこと (この物語では、月読尊つきよみのみこと。去来紗別尊いざさわけのみこと
天照天皇と同一人物)が祀られてゐる。注目
される。(第1表参照)

*

2311^P-2/2



1424

写真図版 377 英彦山 (1200 m)

1324

『九州百名山』 山と溪谷社 2002年8月1日発行 18~19頁参照。

前页1行

$$\textcircled{7} 859 - \frac{1}{2}$$

隘路 853-72 紀上 102' 104' 和名抄 632' 紀上 296' 高場 161' 2,313 P-1/2 560.8.23
 隘路 853-72 紀上 102' 104' 和名抄 632' 紀上 296' 高場 161' 2,313 P-1/2 560.8.23

鬼奴国 (景行紀十八年六月条の王杵名邑) へ
 素戔鳴尊の治政を憎み、日御子の徳を慕う
 素戔鳴尊は、さらにまた続々と、遠くは末盧国や
 その彼方の国々からさえも、全てを擲ちて急
 ぎ馳せ参りて来るのだった。 (第十章 倭国内に置かれた
 軍人どもの 三十ばかりの国々の項 第 225 図参照)
 威勢は、いやか上にも盛り上っていった。
 その高場した意気込みと熱気は、
 神功皇后が曾て海を渡り、狗邪韓国を手中に
 収められたあの当時の衰り立つような状況を
 彷彿として思い起させるものであった。
 色鮮やかな軍旗が、風になびいた。
 是に、田心姫率いるその大軍は、有明海沿
 いの隘路 (大牟田あたり) を通って、
 愈々、素戔鳴尊と相見えろ為に、
 鬼奴国

見齋かす

現在の玉名

H30(2018)6.8(金)~6.9(4回)
 H31(2019)1.24(木)~1.25(3回)
 令和2(2020)2.9(日)~2.11(4回)

2.3/3^p-2/2

元(世)45^p 疾風怒濤 2/16/10^p
 → S60.8.25 ④ → S60.8.24 ④

はい 入って
 ④2312^p-19^付

2/11 下 2/11
 3/10

と 足踏み入れた。
 目指す 邪馬台国は、もう目と鼻の先
 である。
 兵達は、野を覆い山を覆い見渡す限りの
 大地を覆い尽して、南へ南へと、疾風怒濤
 の如く押し寄せていった。

米

1524 100P はまは
 軍神 甚だ 7/1809
 2318 2/2 たいそう
 5608.316
 2.314P
 ひげ 紀上 96
 秋 53
 男王

軍神だ 山 なんと 崇められはいるか、それ

小娘のくせに何を生意気な。この俺に
 矢向うとは甚だもって片腹痛いわ。一捻り
 返し討ちにしてくれようぞ
 こゝに素多鳴命は、兵鼓を打たせて外郭城
 の北面に勇猛な兵を集め下
 へいざ、田心姫のーを迎え撃たん
 と陣容を構えた。大軍勢

男王 素多鳴命は、長須鬘を逆立て、目を斜に
 激昂した。

素多鳴命の布陣

すみ
隅に云 1206^p

コクヨ ケー20 20×20

2,316P

のみ聞える兵共の声が、耳を聳するばかりの
ものとなった。
「ふん」戦いの勝敗は、頭数だけで決
まる。のではないのだぞ。なんだなんだ、
ヘナチヨコが多邇具久(墓)や久延毗古(案
山子)ばかりをあれほど集めおって、一体、
どうしようというのだ。
「それにも、全く卑怯な兄貴のやり方な
ことじゃないか。あんなにも若い女の子を口賢く
おだてあげ、陣頭に飾って来よるわ。自分の
力だけではどうにもならないものだから、亡
くなった阿姉の小娘なんかを祭り上げおって、
恥知らずの穢い兄や、やうなことをやない
か。
「そういえば、あの兄貴は、昔から俺の
為ること為すこといいちいいちケチばかりつけて
おったか、よっぽど俺が疎ましいと見える。
俺憎さで胸がうずうずしているところへ
あの小娘が飛び込んできたものだから、それ
を巧みに利用しているのだ。卑劣な魂胆。性

令和元(2019)7.2(火)~7.2(3回)

F7/2
7/2

2.317^P

けきいん けきせい 騒音マカまいる
激甚 激声 騒音マカまいる
さけび声 じよめ 叫く(喚く)れめく
叫喚(きこかん) → S60.9/2(5)

米

根が腐^{くさ}っ^ておるわい^L
素^す交^ま鳴^な尊^{みこと}は、悪^{あく}態^{たい}の限^{かぎ}りを尽^{つく}して、兄^{あに}月^{つき}読^{よみ}
尊^{みこと}を扱^{さく}き下^おろした。
めきの渦^{うず}に掻^かき消^けさ小^こかち^だあ^あった。
もはや敵^{てき}の銀^{ぎん}音^{おん}動^{どう}よ

小野川

「小野」209P上段
696'

2,318P-1/2

「小野」208P上段 110'5P
紀上110' 延言ナゲ=場 言いたは
百科第18-92頁 開戦宣言 宣戦布告 (一元的な所がある)

天安河をはさんでの開戦宣言

日神田心姫と素戔鳴尊とは天安河を隔て

て「相對」つた

神代紀上第六段一書第三に

「日神素戔鳴尊と天安河を隔てて相對

ひ乃ち立ちて誓約ひて曰はく云々

と記されていゝ。山頂に軍彌呼の百歩

なお「日横山」

の場が築かたと考えたいの東南麓には

南西から北東方向へ流れる小川(菊池川の支

流)がある。

定かでないとはいえず

へその昔肥後国合志原の広大な台地に

か小た壮麗極まりない都城の西北隅に孤立丘

日横山(約一五〇ト)があつて

その東南麓を川幅の狭い天安河(川を

隔てた対岸で喋る言葉が明瞭に聞えるほどの

小川やいま「小野川」というのが南西

を宣戦布告(開戦宣言)

坂の「方向」という

かばや
鎧
矢合せ

主人ニ
金鼓
陣征と陣太鼓
陣中の号令に用いる
図23140 17所 兵を果の

2,318^P - 2/2

698^P - 7/12

から北東方向へ流れ下ったのだうう
と仮定し、話を進めてゆきたい。
（第13図）
へ邪馬台国の「洛陽城」想像図
へ横山周辺地図（参照）

*

（現在の小野川）の南岸一帯に
「さあさあ」とどこからなりともかかってこ
もうすでに素戔嗚尊の兵卒達は天安河

といわんばかりの隊形で、
大軍を待ちかまえていた。
↑↑↑↑田心姫の

音か響きわたる「軍隊の最前面に躍り出た男
素戔嗚尊の陣中に高らかな金鼓の

田心姫の軍勢を睨み据えた。
か「さつと弦に矢を番え、北の方の

（宣戦布告する為の矢）

得も言はず 246
 「う」は3行
 武人 537
 目 2175
 陣形 1146
 鶴翼 389
 若造 2369
 若蔵
 訝 147
 泰然 1341
 1708
 2,319
 「眼前」 2311
 2369
 1708
 1341

するとその時、何と一たことか、田心姫の
 隊列の正面が、突然にも真二つに割れた。
 そーて鶴翼となつた陣形の奥深くから、
 しくも「**泰然**と落ち着き払つた若武者
 の姿が現われ、しずしずと進み出てきた。
 「何だ何だ。あゝなる若造は誰だ」
 素多鳴尊は、怪訝そうに言った。
 「やや。あの風貌は、いーもーや」
 「おお、あゝにおわしますは姫。田心姫で
 ありますぞ」
 素多鳴尊の軍の若武者共は、目の前に現われ
 た年若い武人か、わづか十三歳になつたばかり
 の姫君・田心姫であることに息を呑み、
 驚きを隠そうともせず、感嘆の声をあげた。
 得も言われぬ初初しきぞ凛凛しい田心姫の
 姿に、素多鳴尊の兵達は戦闘状態に
 ある事を忘れたかのように為すところなく、
 一見一見つづけていた。
 毅然と歩を進めてきた田心姫は、やが
 て、天安河の川辺に立つた。

三日月 1.203^P 紀上104^P 540^P 四股では命に^P 紀上104^P 44^P 小林 1090^P 果敢 374^P
 三日月 1.147^P 紀上104^P 11^P 260. 23 2,320

この時の田心姫の様子は一まことに勇ましく
 かつた。
 田心姫は果敢にも、
 髪を結
 んで髪となし、裳のすそを縛って袴にたて
 やさかにいぼつ、
 八坂瓊の五百箇の御統を髻や髪(髪飾り)や腕
 にまきつけ、
 背には千箭の鞆と五百箇の
 鞆を負い、腕には稜威の高鞆を装着し、弓弭
 をふりたて、劍の柄を握りしぼつて、股まで
 めりニむほど力強く、こを踏み、淡雪をふき
 とばすように蹴散らかし、稜威の雄詔の声を
 あげ、稜威の噴譲(責めなげること)の声を発し
 素々鳴尊に面と向かつてこう言われた。
 「われは日御子の宗女田心であります。吾
 が叔父上よ、心してお聞きになるかよい。私
 思うに、――天子は、そもそも天賦の資質
 を備えておらねばならず、万民が徳を慕い敬

観覧P
 紀11044番 紀上88¹ 1行第揮 のりえ1752¹
 2行 走 88¹ 15行性更 三 のとらき物事
 11行 退 紀上88¹ 末3行 トV おきて

うに足る器でなければなりません。そして、
宗廟社稷を良く護り、天下に揺ぎのない法を
示さねばならぬ苦です。講談社分照
とろが素戔鳴叔父よ。汝は、勇悍くはあ
れども性悪く、自ら就くべき国を打ち棄てて
敢えて和馬台国を窺察し、荒々しく力づく
で奪わむとする黒き志をもつて、女王日御子
を心痛の極みに追い立て、やがてついに天
下を我がものとなしてしまつた。
いかし、神性雄健きが故に、天下を治さず
して常に啼き泣ち悲恨み（口を結んで怒りを
表わす意か）、国内の人民を以て多に以て大
折なりむるなど残忍極まりなく、甚だ無道で
ある。
叔父上よ。あなたは宇宙に君臨たるべきお
方ではありませぬ。固に當に遠く東の拘奴国
へでも下つて行くかよろしゅうございましよ
うし。
●田心姫は、その小さな身体を震わせながら
素戔鳴尊の悪逆無道ぶりを責めるのだつた。

こゝれに對して、素戔鳴尊は、さもさも當惑
げにこう言つた。
何と云うことを仰るや。田心姫。吾は
和馬台國を乗取、爲に白日別（筑紫國）を
打ち捨ててこの都へやつてきたわけではあり
ませぬ。私は、其処許の母君があまりに
も悲嘆にくれ、沈み込んでおろすというの
で、その身を案じ、且つ我國のことを憂うあ
まり、病んだ御心をお慰めしようと思つて
都へ早つてきたのです。
とはいへ女王日御子は、もはや宇宙に君臨
するべきお方ではありませんでした。天下が
乱れるのもかまわず、ただただ泣き暮してお
られるばかりだったのです。そこで、甚だ不本
意ながら、私は倭國の爲に善かれと思ひ、政
事をなすことにいたしました。
私があなたの母上を苦めたとはい、真
にと云つて、言掛りとし、か受け取れませぬ
さらに、女王亡き後、幼い姫君であるあな
たに政治向きの煩雜事お任せするような、そ

建日 日向「新」102-79上134
記(星)31

②322¹/₂ 書日別 神皇正統記 51 末
44 ②306¹/₂

たか ぼろきしわき
殉う 書俗
紀下 294¹/₂

②322¹/₂ 2.322¹/₂

②322¹/₂ 124

人な無分別なことが私に出来まいようか。
月読の兄に東国の重鎮としての務めを良く
果ててもらう爲にも、晝日別(肥の国)およ
び白日別(筑紫国)の地は私こそがっかり
統治しなけいばならない、と思つたので
た。*神皇正統記に神代に晝日別は肥の國とある
ところ、黙つて聞いてゐると、
田心姫は、私が残忍極まりもなく多くの者達
を夭折させた、とおつしやる。
いか、どうして私の好き好んで無辜
の民を無下に殺したりいたしましう。女
王に殉つたあ奴婢百餘人は、
我國の舊俗に従つて死んでいったのである。
亡者に殉わせるのは、まことに傷ではありま
すが、其れはそれ、口古の風土というもので
す。
まして、あんなにも偉大な倭国の女王。日御子
が玉折されたのだから、百餘人な人ぞといわす
幾層倍もの奴婢たちを殉わせても、不相応だ
などと言う者はおりません。

11月21日 大カンク 282P
左様 元904P その通り

2,323P
とばかり 元1629P
阿姉 紀上104P

無道 2321P 中巻
元 2155P

それ、あの奴婢達は皆、あなたの母上の
徳を慕い、その死を心から悲しみ、自ら殉死
を望んで死んでいったのです。
それなのに、貴女はそのような無粋ななり
をして、私を責め、無道呼ばわりさん
る。
阿姉の死を心から深く悼み、誠意をつく
して私があれだけの盛大な儀式を取り計らっ
たというのに、貴女は一体どうして、そんな
ふうにお話になるのでしょうか。
私には、さっぱり分かりません。
全く正反對に、
よくぞよくぞ十二分にやってくれたら
と、御言葉こそ相応しいのではありませんか
か。左様でありまよう、田心姫
素子、尊は、言葉をつらねるほどに愈々
と、弁舌爽やかに我が身の潔白を捲いて立
るのだった。
いかりながら勝気にも、田心姫は黙って
いなかった。

土まじり
狭霧 紀上105³行

2,324^P

一柱一息 2351^P
住持 99^P

紀上91,105,107^P
紀(四)46^P

まよあが 清く明きは...
十握剣 紀上105^P 91^P 注23

「よくぞ其のような口幅ったいことを、抜
拔と、臍面もなく喋れる言えるものよし
■ そう言うなり田心姫は、さつと、身に帯び
ていた十握剣を抜き放った。
「素多鳴の叔父。あなたには清い心とな
川ようですぬ。濁い心―がなく、恥を恥とも
思わぬお方には武力でもって知らせるや
かない」
■ こに田心姫は、キラキラと光る十握剣の
切先に手を当てて一撫でし、さらに「はあ
っ」と息を吹きかけた。
■ すると、思ひ冷気によって命やされた白
狭霧となり、剣を隠した。
■ その様子を見守っている者達の目には、
― あたかも田心姫が長剣を呑み込んでし
またかのように見えた。
■ しかし、次の瞬間、その剣はもはや口
中にはなくて、田心姫の頭上に燦然と輝いて
いた。
* なお、

つか
た

天つ
改行

キラリ 前頁9行
2,325P
如何せん
どうしようもない

「一握は、小指から人差指までの幅のこと
で、ハコ十⁴センチ、従って十握剣は、ハコ一〇〇⁴センチの剣である」
という。 (「日本書紀」(上) 日本古典文学大系
山政書庫、九一頁、注二三参照)

田心姫は、心の内に着え褒る思いを込め
子の手で削つて、十握の長さがあったのであ
うう
と思わゆる。

ありつたけの力で、

「ええいっ
と、その剣を素戔嗚尊めかけて投げつけた。
「かし如何せん。田心姫が抛つた十握剣は

キラリと光って飛んだ途端、手近に横たわる
天安河の河原の石を、思いつき叩い

ていた。
「十握剣は、石に当たると「脆くも」三つに
砕けて宙を舞い、水飛沫を散らせた。

「ふふん」

四本の指の
ゆび

H30(2018)6,9(土)~6,11(4回)
令和2(2020)10,25(日)~10,27(4回)

(105P)
紀上107
108P
2,326P
記(黒)46~47

吹き棄つる
記(黒)47P
こはか
小馬鹿P
元823

記(黒)47P
珠をかみて吹き棄つる

紀上110P
左のものと
底神

→ H4.2.18(水) @
11/10, 10, 10(土) 紀上105~1

10/27
10/26
10/25

と素多鳴尊は、これをみて嘲笑い、自分
の左の髻に纏っている五百箇の御統の瓊を口
に放り込んで、こ水見よかしに、カリカリと
噛んだ。
「このように、噛みつぶしてしまおうぞ」
という仕草であった。
[?]やがて、ホッパタを大きくぶくらま
せ、口先をすぼめた素多鳴尊は、全く小馬鹿
にいたように、
「ぶうッ」
と、その瓊を田心姫の方へ向って吹き棄てた
(神代記。神代紀上第六段一書第一・二・三
参照) OK
田心姫が素多鳴尊に向かつて投げ与えられ
た口十握剣は、素多鳴尊の所有物である
瓊勾玉は、田心姫に吹き棄てられ、八坂
の土まかたす
と素多鳴尊は、田心姫の所有物がある
(記・紀参)